

ロンチェンパにおける 3 脈の理論

安 田 章 紀

1. 序 インド後期密教において教理的・実践的に重視された¹⁾「脈」(rtsa, nāḍi) が、同密教の強い影響下に形成されたチベット密教でどう継承され展開したのかについては、いくつか研究がなされている²⁾にもかかわらず、いまだ謎に包まれている部分が多い。本稿はこれまでの先行する研究成果を受けつつ、研究資料をより充実させるべく、チベット仏教の 1 派であるニンマ派の代表的学僧ロンチェンラブジャムパ (Klong chen rab 'byams pa, 1308–1363) による脈の記述を収集・整理して提示することを目的としている。

2. 総説 そもそも人体内を走る脈の総数は「体毛の数だけ」或いは「72,000 本」などとされている³⁾が、その中でとりわけ重要なのは「ロマ」(ro ma, rasanā), 「キャンマ」(rkyang ma, lalanā), 「クンダルマ」(kun dhar ma, avadhūti) 或いは「ウマ」(dbus ma, madhyamā) の 3 本である。まず、色、位置、素材を確認する。

ロマは白で右、キャンマは赤で左、クンダルマ或いはウマは中央に存在する。〔中略〕ロマは一般的には水の元素によって生起させられ、キャンマは地によって生起させられ、クンダルマは風によって生起させられる⁴⁾。

次に、これら 3 本の脈の筋道は以下のように細かく描写されている。

ロ〔マ〕とキャン〔マ〕2 本の 21 個の結び目はウマに対して、人差し指を繋ぎ合わせたかのように鎖状にからみついているが、〔その〕左と右〔両脈の鎖の〕上端は眉間に〔刺さり〕、下端は肛門の穴 (lte 'og sbu gu) の境目に刺さっている。その微細な分枝は性器と肛門に刺さっている。上端から 9 つに枝分かれしている〔3 脈〕のうち、ロマは心臓の右側の先端から出て、咽喉に出て来、3 つの先端に枝分かれするが、そのうち 2 本は 2 つの鼻に刺さることによって鼻識を支える。1 本は舌に刺さることによって舌識を支える。キャンマは心臓の左側の先端から出、咽喉の脈の網から出て来て、3 つの先端に枝分かれする。その中央の〔枝〕は全身のあらゆる方向に刺さる無数の枝によって身識を支える。右と左の 2 本は頭部の中に出て来、両目に刺さる。根元が細く先が太い鮎牛の角のような〔2 本の枝〕によって眼識が支えられて色を享受し、とりわけ、燦然たる智慧の顕現を見させる。中央で真っ直ぐであるクンダルマの先端は 3 つに枝分かれして、中央の先端は〔頭頂の〕梵孔に刺さって無分別智の身の出現を支え、不浄時には意識を

支える。〔ウマの〕右と左2つの先端は、右と左2つの耳に刺さって耳識を支える。このようにこれら3脈には5つの感官の門の6識の群れが〔身を寄せている〕、あるいは染汚意に愛憎のいずれかが生起すると、その〔染汚意も〕身を寄せるので、7〔識の〕群れが〔身を寄せている〕、あるいは生命脈には意が身を寄せているが、5つの門など知識すべての所依である阿頼耶識〔も〕生命脈に身を寄せる。以上8識の群れを支えるのでそれら3つを「3本の主要脈」と呼ぶ⁵⁾。

ここでは、肛門から頭部にいたる各脈の、絡み合う複雑な経路の詳細な記述のほか、3本の脈が8識というあらゆる人間の知的機能の支えとなっていることが読み取れる。引用文では、8識のうち「染汚意」は、明記はないものの、3本のいずれかを、「意」と「阿頼耶識」の2つは「生命脈」(srog rtsa)、つまり、ウマそのもの、或いは同脈の心臓通過部分を受け皿としていることが述べられている。すなわち、3つの脈が8識の活動全てを支える大きな役割を担わされているのである。

さらに、脈の機能としては他に次のようなものが指摘される。

身体の4つのチャクラの脈にとっての生命の樹であるロ、キャン、クンダルマの3本は、外的には身口意の3つを生起させ、内的には仏の身口意を生起させ、秘密には化身、受用身、法身の3つを生起させるので、柱のありようで真っ直ぐに存している⁶⁾。世俗としては〔中略〕左は貪、右は瞋、中央は痴の所依を為す。〔中略〕勝義の時には〔中略〕右は方便の性質、左は般若の性質、中央は不二の性質から成っている。道では左は楽、右は明、中央は無分別という3つの所依を為すので、果では中央は法身、右は受用身と化身、左は虚空の果てまで行き渡る大樂の光明の所依を為す⁷⁾。

ここでは、3つの脈に多種多様な教理的意味づけがなされており、三業や三毒という低次のものから、仏陀の三身に至る高次のものまで、3つ1組の様々な範疇が配当され、脈の働きの幅広さを物語っている。

また、そもそも3脈が初めて体内に形成される過程に関しては、以下のような興味深い叙述が見いだされる。

父親の滴〔である精液〕が om, āh, hūm 字の音声を伴なって飛び出して、母親の虚空〔である女陰〕に融解する。母親の縁〔である経血〕も3文字の音声を伴っていて、6つの音声が内部でぶつかり合うことによって、子供の身口意の3つの基礎が樹立され、ロ、キャン、ウマの3つになる。その中央の中には om, 光 ('od), 普賢父母尊の御姿 (Kun bzang yab yum gyi sku) という3つが成立、右には āh, 光, 御姿、左には hūm, 光, 御姿の3つが成立し、身口意という3つずつの所依として成り立つ⁸⁾。

すなわち、両親の精液・経血に含まれていた6つの音声の衝突が胎児の3脈を造りだすのである。のみならず、これら3文字は3脈に内在し続けているという。

その3脈の中には自生の文字 om, āh, hūm の3つが白赤青の3つとして右、左、中央

(58)

ロンチェンパにおける3脈の理論 (安 田)

の3つに居住することによって、本然的三身の所依を為している。不浄な〔3文字〕は三毒の所依を為し、清浄な〔3文字〕は外的には身口意の3つ、内的には仏の身口意であって、秘密には三身が実際に出現する土台を為す⁹⁾。

これら3文字のほか、脈の含有物としては、さらに「滴」(thig le, bindu) と呼ばれるものも3脈で様相を異にしつつ存在している。

ロマには方便の性質を持ち有漏、楽の性質を持つ、世俗なる原因の滴 (kun rdzob rgyu'i thig le), キャンマには般若〔の性質を持ち〕無漏、空の性質を持つ、勝義なる智慧の滴 (don dam ye shes kyi thig le), クンダルマには燦然たる、自ずから成立した、本性なる存在自体の滴 (rang bzhin chos nyid kyi thig le) 〔が存在するが〕, その本質は根源界と智慧の不二 (dbyings dang ye shes gnyis su med pa) である¹⁰⁾。

3. 各説 次に、これら3脈を位置、運搬物、機能という3つの視点から検討し直してみる。

3.1. ロマ まず、ロマは既に述べたように右に位置するが、これは男性に限った話であり、女性では左である。この差異は男女間に、性的快感の持続性に関して次のような相違をもたらす。

ロマが男性の右に出て来ている〔事実〕は、菩提心を生起させる〔結果になる〕。女性の左に出て来ている〔事実〕は、菩提心を閉じ込めて〔放出させず、その結果〕、欲望に満足がない¹¹⁾。男性では〔菩提心〕が実際に落下することによって、快感に出会うことにより触覚を減ぼすと言われる。すなわち〔快感を〕味わって滴が落ちた途端、快感を破壊するのである。一方、女性は〔菩提心がロマの〕5有種族〔脈〕(rigs can lnga)¹²⁾に包まれて〔落下せずに〕留まり続けるので、触覚が増大すると言われる。再び快感が増幅して足ることを知らない¹³⁾。

さて、ロマの運搬物については上述のものと重複が若干あるが、以下が参考になる。

右には水、血、菩提心が移動するので、滴のはたらき〔が主要〕である¹⁴⁾。精液つまり菩提心についてはロマを通して月〔を象徴する〕下を向いた ham 字から落下することによって、一般的にはあらゆる身体の精力を生育し、特別には脳髓、骨髓、脂肪、骨を生育する¹⁵⁾。ロマは〔元素の〕精 (dangs ma) である灯明の光沢 (sgron ma'i mdangs) を見せ、滓によって小便落下のはたらきを行なう¹⁶⁾。

また、ロマは身口意のうち、とくに「身」の所依とされていたように、人体のありようを規定し、生理的側面に強く影響する。

ロマの脈は歪むと身体が歪んで来ることなどは上と同じである。真っ直ぐだと身体的特質が完璧になり、容姿と若さを具える。脈が良好なことで身体にも美質を備えるのである¹⁷⁾。ロマは食物の受け入れ、食物の精と滓〔の分別〕、洗浄を本質とする。その管が広ければ、その人の腹は大きく細ければ腹が小さい。湾曲していれば、常に吐き気がし

て食物を受け付けず、種々の一時的な病気が沢山ある¹⁸⁾。

3.2. キャンマ さて、ロマとは逆に、キャンマは男性では左、女性では右に位置する。これも両性間の相違の原因となるが、ロマとは以下のように意味合いを異にしている。

キャンマが男性の左になっている〔事実〕は、〔男性修行者が〕血の投射力(khrag gi 'phen pa'i stobs)を手に入れて鼻から血を漏れ出させる手続きによって、智慧〔の顕現が眼前に漏れ出す〕時間を手に入れる〔ことができる原因となる〕。一方、女性の右になっているのは、そこから5有種族脈(rigs can lnga'i rtsa)に枝分かれして男性に無い病と色々な型〔が女性にあること〕を指し示している¹⁹⁾。

キャンマの運搬物については既述内容との重複を含んでいるが、以下が参考になる。

左を通して元素の精(byung ba'i dangs ma)や智慧が動いているので、脈自体としてのはたらき〔が主要である〕²⁰⁾。左には本性の滴(rang bzhin gyi thig le)が微細な〔元素の〕精の光彩(dangs ma phra mo'i gdangs)〔の中〕に、〔さらにその〕光〔が発する〕自発的な光彩(od kyi rang gdangs)として居住しているのみであって〔これは〕交合による樂の本質を空へと変容させる意味合い〔を持っている〕²¹⁾。キャンマは〔元素の〕精を上方へ投射することによって〔それを〕灯明そのものの自発的顕現(sgron ma nyid rang snang)として〔修行者の眼前に〕見せ体験させ増幅させる。一方、そ〔の精の〕滓を下方へ分けることによって大便として廃棄する²²⁾。〔菩提心は〕キャンマを通して太陽〔を象徴する〕a字から落下することによって、肉、血、小便、皮、頭髮、体毛を生起させる²³⁾。

ロマの場合、「血」や「小便」といった不浄なものと並んで、「〔元素の〕精」という清浄なものも脈内を通っていたが、この引用文からは、キャンマも同様であることが分かる。

また、キャンマはとくに「口」の所依とされていたように、各人の声のありようを細かく規定する。

キャンマは口を生起させる。それにゆがみが無くまっすぐなら、美声であり表現がはっきりしている。細い分枝があるならば、声が吃って短いか表現がはっきりせず言い淀むようなことが出て来る。本来は分枝やゆがみは存在しないのである。その脈が湾曲したなら、声が詰まり声になったものには欠落が出て来る。その同じ脈に上や下が太かったり細かったりする凹みがあるなら、声に尖りや途切れが出てくる。その脈に折れ目があるなら、不明瞭だったり震えたりする声になる。脈が透き通ってあれば、声がはっきりして他人を傷つけることが出て来る²⁴⁾。

3.3. ウマ ウマは左右2つの脈とは異なって、性による差異が見られない。運搬物については両脈と同様、やはり、以下の通り、浄不浄の双方にわたってい

(60)

ロンチェンパにおける3脈の理論 (安 田)

る。

クンドルマは「元素の」精を上へ投射することによって、勝義の菩提心を実際に示現させ、一方、滓を下方に漏らすことによって、世俗菩提心の滴を下降させる²⁵⁾。中央には血や小便がなくて虚ろで透き通っており、風のはたらき「が主要である」²⁶⁾。中央には、清浄な燦然たる離戲論の法身の滴 (chos sku'i thig le spros bral 'od gsal dag pa) が、自生の智慧の灯明が燃え盛るための基盤として居住している²⁷⁾。

またウマはとくに「意」の所依とされていたように、以下のごとく心的側面に強く作用する。

クンドルマは心を生起させるので、その脈にゆがみが沢山あれば常に心昂ぶり、一つに落ち着かない。それに分枝があれば、俊敏だが忘れっぽい。太かったり細かったりがあると、知的作用の移り変わりが沢山あって1つに安定せず沢山の仕事に取り組んで到達点がない。その脈が透明であれば、思ったことがなんでも善になり洞察を備え聡明である。その脈に太い細いがなく充実していれば、知性が安定し移り変わりがなく。右に傾いていれば分別が多く、左に傾いていれば常に疑いと不信にとどまる。その脈が変化を来たせば常に苦が多く心が安穏でない。その脈が顫動すれば常におおらかで善にはげむ。その脈が大口ならば常に精進が大きく取り組みが完成に至る²⁸⁾。

4. まとめ 以上、3脈に関するロンチェンパの記述について、多角的な視点から紹介した。3脈以外の他の脈については扱わなかったが、今後はそれらの脈についての整理と、脈理論が彼の身体論の中で持つ意味合い、更には彼の理論がインド・チベット密教における脈理論の歴史の中でどういう位置にあるか、研究の必要があろう。

-
- 1) 杉木 [2007], Wallace [2004]. 2) Guenther [1986], Scheidegger [2007], Germano [2007]. 3) ZGP 153.5-6. 4) ZGP 154.1-3. 5) ZGP 156.5-158.3. 6) ThChDz 188a7-b1. 7) ZGP 154.5-155.3. 8) ThChDz 188b1-3. 9) ZGP 155.3-5. 10) TshDDz 978.1-3. 11) ThChDz 192a3-4. 12) ThChDz 192a5-192b3 を参照. 13) ThChDz 194a3-4. 14) ThChDz 191a7-b1 (= TshDDz 976.3). 15) *sNyan brgyud chen mo nges don mngon sum rang snang* 387.2-3. 16) ThChDz 194a1. 17) ThChDz 193b3-4. 18) ThChDz 194b1-2. 19) ThChDz 192a4-5. 20) ThChDz 191b1 (= TshDDz 976.3). 21) ThChDz 214b4-5. 22) ThChDz 194a1-2. 23) *sNyan brgyud chen mo nges don mngon sum rang snang* 387.3. 24) ThChDz 193a7-b2. 25) ThChDz 194a2. 26) ThChDz 191a7 (= TshDDz 976.2). 27) ThChDz 214b5. 28) ThChDz 193b4-7.

〈略号および一次文献〉

KhGYT: *mKha' 'gro yang tig*, in NyThYZh, vols. 7-9. ThChDz: *Theg pa'i mchog rin po che'i mdzod*, in Ehrhard [2000], pp. 1-510. NyThYZh: *sNying thig ya bzhi*, 13 vols., Delhi: Sherab

Gyaltsen Lama, 1975. *sNyan brgyud chen mo nges don mngon sum rang snang*, in BMYT, part 2, 379.5–417.2. BMYT: *Bla ma yang tig*, in NyThYZh, vols. 1–2. TshDDz: *gSang ba bla na med pa 'od gsal rdo rje snying po'i gnas gsum gsal bar byed pa'i tshig don rin po che'i mdzod*, in *mDzod bdun*, vol. 4, pp. 767–1547. *mDzod bdun: mDzod bdun: The Famed Seven Treasures of Vajrayana Buddhist Philosophy / by Kun mkhyen Klong chen pa Dri med 'od zer*, 7 vols., Gangtok: Sherab Gyaltsen and Khyentse Labrang, 1983. ZGP: *mKha' 'gro snying tig gi man ngag zab don rgya mtsho'i sprin*, in KhGYT, part 2, 1.1–488.5. 杉木恒彦 [2007]: 『サンヴァラ系密教の諸相—行者・聖地・身体・時間・死生』, 東京: 東信堂. Ehrhard, Franz-Karl [2000]: *The Oldest Block Prints of Klong-chen Rab-'byams-pa's Theg mchog mdzod: Facsimile Edition of Early Tibetan Block Prints with an Introduction*, Facsimile Edition Series 1, Lumbini: International Research Institute. Germano, David [2007]: “The Shifting Terrain of the Tantric Bodies of Buddhas and Buddhists from an Atiyoga Perspective,” in *The Pandita and the Siddha: Tibetan Studies in Honour of E. Gene Smith*, ed. Ramon N. Prats, Dharamsala: Amnye Machen Institute, pp. 50–84. Guenther, Herbert [1976]: *Kindly Bent to Ease Us: Meditation (Part 2)*, Berkeley: Dharma Publishing. Scheidegger, Daniel [2007]: “Different Sets of Light-Channels in the Instruction Series of Rdzogs chen,” *Revue d'Etudes Tibétaines* 12, pp. 24–38. Jampal Kunzang [1973]: *Tibetan Medicine: Illustrated in original texts*, London: Wellcome Institute of the History of Medicine. Wallace, Vesna [2004]: *Kālacakratāntra: The Chapter On The Individual Together With The Vimalaprabhā*, New York: Columbia University Press.

〈キーワード〉 ロンチェンパ, 脈, 脈管, ロマ, キャンマ, ウマ

(京都女子大学非常勤講師, 博士 (文学))